

バルセロナの秘密

盛田 常夫

国際交渉力の欠如

このところ、日本のスポーツ界の国際交渉力を疑わせるような事態が続いている。ワールドカップの日韓共催決定や、その後の開催会場数決定などの一連の国際交渉のなかで、いったい日本サッカー協会がどれほどの交渉力を発揮したのであろうか。事の成り行きをみてみると、すでにFIFA（国際サッカー協会）内部で事前に決定されていた事柄を、強く押し返すこともなく、そのまま承ってきているようにみえる。これではまるで子供の使いだ。巨額の資金をばらまいている割に、日本の交渉力が弱いと感じるのは私だけではあるまい。

それもそのはず、FIFAにはアジアから選出された理事で、韓国の実業

家がいる。それも元サッカー選手でも何でもない。語学が堪能なビジネスマンがFIFAに常駐し、毎日裏交渉しているのだから、会議の度に、押っ取り刀で語学もできない日本の元サッカー選手がこのこ出かけても、勝ち目がないわけだ。最初から、お金の使い方を間違っている。日本のスポーツ界が国際的な舞台で日本の主張を通そうとするなら、まず国際交渉を担当する優秀な人材をスカウトすることから始めなければならない。しかし、それが分らないところに、日本のスポーツ社会の根本的な問題がある。政治家をどれだけ後援者に付けても、国際社会では通用しない。

すべてに世界には古いしきたりや、慣習があり、外からは口出しできないのがふつうだ。とくに日本のスポーツ界は学校スポーツを基礎にしており、専門性以外の封建的な人的関係が幅を利かせている。その後進性は目を疑うばかりだ。その典型は柔道。

欧州が以前よりカラー柔道着の使用を要請していたのにもかかわらず、日本は一途に白にこだわってきたために、すでに周りは四面楚歌の状態だ。運まきながら、カラーの畳や、ズボンにカラーラインを入れた試作品を発表したが、時すでに遅し。後手後手に回った付けは重い。柔道界などはもっとも国際化に不向きな世界であるが、すでにインターナショナルなスポーツとなった以上、世界的な普及戦略が必要なことと言うまでもない。かのウィンブルドンですら、時代の要請から白の強制は断念している。

残念ながら、国際的な活躍できるような人材は柔道界にはいない。とすれば、外から優秀な人材を迎える以外にないではないか。そこにお金をかけなければ、日本の柔道界は欧州に従うほかに道はない。

同じことはオリンピックへのプロ野球解禁についてもいえる。アマ球界の山本理事長は、「オリンピックへのプロ

口の参加は野球の普及につながらない。日本はプロの参加は必要ない」という。今時、プロの魅力のないスポーツ人口を増やすなど考えられない。

プロにも欠けるプロ精神

野球にはプロがあるから、柔道のように後手後手に回ることもないだろうと考えがちだが、清原FAのごたごたをみていると、日本のプロ球界も本当に経営者がいるのかと疑ってしまう。

清原をとるなら、落合は要らない。これは野球の論理からみても、ビジネスの論理からみても明らかだ。高々1〜2年しか働けない。それも「打つだけ」という選手を、2億円を超える年俸で雇っておく意味はない。ところが巨人のフロントはこんな単純な論理を通すのに、右往左往している。「早く結論を出してくれなければ、再就職に影響する」という落合の議論が正論。いったい巨人のフロントにはどんな人材がいるのだろうか。

それにしても、清原も甘えている。

「11年前のドラフトを謝って欲しい」というのは、もうプロの言葉ではない。それを受けて謝る巨人のフロントも馬鹿だ。人を採るのも、解雇するのもビジネスだ。それを論せないフロントは情けない。

西武に行ったことで、西武の全盛時代の主砲として、十分すぎるぐらいの待遇と結果を得たはずだ。謝る必要があるのは、一度もタイトルを取れていない清原自身だ。まず西武のファンに謝ることが先だ。「11年間、身に余る高給をもらっていないながら、一度のタイトルを取れず、ふがいない成績で終わってしまったことを謝ります。ここは心機一転、別の球団で野球人としての後半を期したいと思えますので、ご容赦ご勘弁を」と。

余りに日本的な

このところ日本のマラソン界は人材が払底している。それにしても悔やまれるのはロサンゼルス大会の瀬古、バルセロナ大会の谷口である。この両選

手には、失敗に至る伏線がある。その両者に関係しているのが、日本陸連の強化委員長だった小掛照二。

小掛といえは、メルボルン大会前の三段跳びで、日本人で初めて16メートルを超え、メダルの期待がかかった選手であった。この頃は、自由形の山中毅、平泳ぎの古川勝などの懐かしい顔ぶれが、日本を代表する選手だった。

ロサンゼルス大会当時、瀬古は早稲田の中村監督とマンツーマンの生活を送っていた。瀬古の成功も失敗も、すべて中村監督との関係があったからこそ。しかし、ロサンゼルス大会は失敗だった。事前の調整ミスで、大会直前にアメリカ合宿からいったん日本に戻るといふミスまで犯している。調整のミスと時差の影響で、まったく精彩のない走りに終わってしまった。

それに加え、小掛が馬鹿なことをした。日本のもう一人の代表は中山。中山は日本のスポーツ界では珍しい自己主張を通す選手として知られていた。代表選手に決まってからも、瀬古は中

村監督と練習スケジュールをこなし、中山も自分で練習をこなししていた。ところが、小掛は日本の代表選手が仲が悪いのは困るといので、選手村に入ってから、瀬古と中山を同室にするという決定をおこなった。団体競技ではあるまいし、まさに学校スポーツの合宿精神である。

本番に控えて、自らの精神的な緊張度を高めなければならぬ時に、今まで一度も一緒に生活したこともない他人と生活しなければならぬ疲れを考えられないところに、小掛の無神経さがある。

どうして「こけちゃいました」のか？小掛が強制した単純な集団主義。それは再びバルセロナ大会の悪夢の呼び水となった。夕刻出発の男子マラソン。先頭集団にいた谷口が、給水所でドリンクを取り損ね、もたもたしているうちに靴を踏まれ、靴を探すのに右往左往していた光景は多くの人の記憶に残っている。なぜ、あのようなも

たつきがあったのだろうか。ドリンクを取り損ねたのも、靴を探すのに時間がかかったのも、「色つき水中メガネ」のためだ。

日本のマラソン選手は男女とも、最初から奇妙なメガネを掛けていた。マラソンコースに注ぐ西日にたいする小掛強化委員長の発案だったらしい。ただし、自己主張の強い中山選手だけはメガネなしだった。慣れない物を装着することが、かえって邪魔になるからだろう。

マラソンに水中メガネ。谷口の失敗はここにある。慣れない水中メガネによって、視界は著しく狭められていた。だから、ドリンクの取り損ねがおき、靴を探すのに右往左往した。私の記憶が正確であれば、靴が見つからないので、谷口はメガネを投げ捨てている。誰だって「色つきの水中メガネ」で捜し物をしてごらんない。見つかる物も見つかりません。あのタイムロスがなかったなら、谷口はメダルをとっていたであろう。

くだらない発案を押しつける小掛の責任は一番大きい。それをそのまま受け入れてしまう選手も未熟だ。水中メガネでなく、ふつうのサングラスだったらもっと結果が違っていたはずだ。全員、同じスタイルを採用するところがきわめて日本的。なぜ、自分で考え、自分に適した方法を探らなかつたのだろうか。

スポーツ界に限らず、ビジネスの世界でも、日本人が必要とし、欠けているものは、自分自身にたいする自信と、それに裏付けられた自己主張であり、それをユニヴァーサルな論理で国際的な場で試す経験である。スポーツの世界の出来事は、日本社会を写す鏡として肝に銘じたい。

